

マーケティングを学んで(?) 思うこと

第16期生 柳原 慎平

小野ゼミ生としての活動が終わろうとしている。すなわち、それは、学生生活の終わりも意味している。小野ゼミ生として過ごした2年間は、小野晃典先生をはじめとして、諸先輩方、同期、後輩などの素晴らしい方々に恵まれた日々であった。感謝の気持ちは、容易には筆舌に尽くし難い。そして、この限られた紙面には収まりきらない。それゆえ、感謝の気持ちは、OBとして何らかの形でゼミに貢献すること、また、小野ゼミの納会にお邪魔することで表すことにしたい。一方、私がこの紙面を借りて書き残しておきたいことは、2年間の小野ゼミ生活を通じて得た成長である。それは、「『無知』の再獲得と、事象を分析する姿勢の獲得」と「先入観から離れようとする姿勢の獲得」である。

本稿で言う無知とは、自分が知らなかったり、気付いていなかったりする事象と事象が起こる仕組みを指す。無知について改めて考えると、幼少期の人間が見る世界は無知に溢れている。私は、知らない言葉、知らない生き物、また、知らない概念だらけの世界に対して、本を読むことによって、それらを主体的に既知のものにしようとする児童であった。しかし、「学校」という組織に属すると、主体性は消滅する。大学2年生までは、学校で教えられることだけを理解し、単に暗記することが「優秀さ」の証であったからだ。一方、小野ゼミで経験した世界はまさに「幼児退行」的な世界観であった。入会して以来、世界における無知の多さと、世界が仕組みによって構成されていることに対して、感嘆を覚える日々であったからだ。その要因は、文献を読んで無知を主体的に理解しようとする姿勢を評価する、小野ゼミの文化であった。また、無知の事象の仕組みだけでなく、既知のそれらをも理解しようとする姿勢を評価する、小野ゼミの文化であった。自分を優等生として位置付ける人々は、単に暗記することによって、何らかの肩書を得て、社会的名声を得ることのみ意味を見出すかも知れない。実際に、単に何かを暗記していることが評価される社会だからだ。しかし、それが優秀さの本質でないであろうことを私は小野ゼミで学んだ。優秀さの本質は、事象を仕組みから理解し、応用して他の事象を分析できるという、人間の内面的な賢さなのだ。

また、本稿で言う先入観とは、自分自身の価値観や感情を事象や他者に対する理解に際して持ち出す姿勢を指す。事象や小野ゼミの活動において、事象を仕組みから理解しようとする姿勢を身に付けたことは、自分の先入観から距離を置くことに繋がった。有り体に言えば、「人の気持ちになって考える」ことが以前よりも可能になったのである。それは、論文執筆活動においては、論文の著者たちの主張と彼ら／彼女らが捨象した点を理解することに繋がった。また、ゼミ活動においては、他のゼミ生の意見がいかなる思考によって為されているかを理解することに繋がった。先入観から離れようとする姿勢を持った今、これまでの人生がいかに先入観に満ちたものであったかを反省している。先入観から離れていれば、たくさんの後輩がゼミを離れることもなかったのかもしれない、と思うからである。

一度は小野ゼミを辞めようとして、それを行動に移そうとしたこともあった。しかし、今思うことは小野ゼミで確実に自分は成長したということである。貴重な学生期間の終盤を、高め合いつつも仲良く同期とともに活動できて本当に良かった、とこれからの人生で私は何度も懐古するであろう。